

ピリオド鍵盤楽器の特性がピアノ作品に与えた影響 ——ウィーン式アクションをもつフォルテピアノとロベルト・シューマンを 事例に——

木村彩乃 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

要旨

ピアノは1700年頃に発明された。しかしそれは現代のピアノ（本論文においてモダンピアノと記載）と比較して、打弦楽器であるという共通項こそもつが、構造や音色を異とするものであった（モダンピアノと構造が異なるピアノ全般を区別のため、本論文においてフォルテピアノと記載）。その後現在の形が一般的となる19世紀末～20世紀初頭頃まで、ピアノは時代に合わせて変化を重ねてきた。楽器の変遷の間にかかれたピアノ作品を作曲された当時のフォルテピアノで演奏すると、モダンピアノの演奏では表現しきれない音響効果を生み出すことがあり、作曲家が本来意図したであろう音楽を知ることができる。この点に着目し、本論文では、当時の楽器の特性という視点から作品を分析することで、ピアノ作品が当時のフォルテピアノの特性に影響を受けていることを明らかにすることを目的とした。

古典派の作曲家とフォルテピアノの関連を取り上げた先行研究は多く存在するものの、ロマン派の作曲家に関しては、対象が一部の作曲家に留まっていた。それを踏まえ本論文では、ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856)と彼のピアノソロ作品に焦点を当てた。フォルテピアノと関連した研究があまり及んでいない作曲家のうち彼に着目したゆえんは、彼が、モダンピアノの基礎となったイギリス式アクションをもつフォルテピアノが台頭した時代にもなお、伝統的なウィーン式アクションをもつフォルテピアノを好んでいたことにある。この彼の楽器に対する顕著な好みは、同時代の作曲家のうちでも突出していた。

本論文は全2章から構成されている。

第1章では、本論文において分析視点となる楽器（フォルテピアノ）に注目した。第1節では、フォルテピアノの具体的な特性について時代を追って

概観し、第2節では、ロベルトが特に好んだウィーン式フォルテピアノに焦点を絞ってその特徴を述べた。ロベルトの時代のフォルテピアノは、歴史の流れの上ではよりモダンピアノに近い楽器となっているが、構造そのものや音色にモダンピアノにはない特性が残されていることがわかった。また、ウィーン式のみみられる特性も明らかとなり、イギリス式を主に使用した同時代の作曲家と差別化して取り上げる意義を見いだした。さらに、フォルテピアノの楽音の録音や当時出版された奏法に関する理論書を通して、モダンピアノを知ってからフォルテピアノをみた現代人の視点ではなく、最新の楽器としてフォルテピアノに触れていた当時の人々の視点を再構築した。

第2章では、第1章で指摘したフォルテピアノの特性をもとにロベルトのピアノソロ作品を分析した。第1節では、他作曲家の作品を楽器の特性という視点から分析した先行研究を扱い、楽器の視点による作品分析の方法と実態を確認した。音の減衰や発音、ペダルなどの特性が作品に影響しやすいことがわかり、分析の際に着眼すべき楽器の特性が明らかとなった。第2節では、ロベルトのピアノ作品について扱った。彼の作品は文学等、楽器以外の視点からはしばしば研究されてきており、書法が特徴的であると言われている。どういった点が特徴的であるか、同時代の作曲家作品と比較しておさえることで、分析の際に着眼すべき語法が明らかとなった。第3節では、彼が生涯で使用したピアノを示し、彼がウィーン式を偏愛した事実を根拠づけた。彼は、ウィーン式特有のタッチとその構造がもたらす音色を好んでいた。第4節で、楽器の特性という視点から、ロベルトのピアノソロ作品の分析を実施した。当時のフォルテピアノの特性を反映していると考えられるいくつかの語法が、彼の複数の作品に共通してみられた。

結論では、ロベルトのピアノソロ作品が、彼の好んだウィーン式フォルテピアノの特性を生かしていることを述べた。分析から、彼がウィーン式フォルテピアノを使用していたからこそ生まれた語法があることが明らかになっている。この成果は、これまで同時代の作曲家作品と比較して彼のピアノ作品が特徴的であると言われていた理由のひとつに、彼の好んだ楽器が他の人とは異なっていてウィーン式であった、という楽器の要因が加わることに繋がると考えられる。